

田村栄一郎先生のご退職にあたって

三本松政之

田村栄一郎先生は、1989年3月に学芸大学を退職され同年4月本学部においてになられた。だが先生と本学部との関係はさらに12年さかのぼるのである。先生は1977年から非常勤講師として本学部の教育にたずさわられてこられた。本学専任教員となられ本年度3月に退職されるまでの期間と通算すると実に19年の長きにわたりお世話になったことになる。

田村先生に専任として本学において頂くことになったのは、大学院の設置との関連であった。私にはこのことで思い出されることがある。それは同じ時期に大学院設置の準備をしていたある大学の知人が教員候補として田村先生の名前を口にしたので、すでに先生から本学へのご返事を頂いた旨を伝えると知人はがっかりしていた。もちろんこのことはご本人の知らないところでの出来事である。

学芸大退職後も引く手数多であったであろう先生に本学において頂けたことが、先生にとってはほんとうによかったのか、とときどき思うことがある。その一つの理由には大学院の認可までに当初の予定から4年という時間を必要とし設立のために先生にもたいへんな御苦勞をおかけしたことにある。だが、それ以上に先生にお気の毒な思いをさせてしまったように思えてならないことがある。先生は、1992年度のこの紀要に「いまから3年前の1989（平成元）年の4月に、この大学に再就職した時に、こんな文章を書かなければならないなどは、夢にも思っていなかった」とお書きになっている。その文章とは「勅使河原勝男君の逝去を悼む」という追悼文のことである。故勅使河原先生は、田村先生の学芸大時代の教え子である。お二人の「つきあい」は、公式には学芸大に大学院が出来て田村先生が初めて大学院の授業を担当されたとき以来とのことである（『人間科学研究』第14号参照）。勅使河原先生がおられたからこそ本学にお出でいただけたのだと思う。だが、同僚としてその葬儀に立ち会わねばならなかったことは本当におつらかったことと思われる。しかし、先生は貴重なメンバーを失った研究室の立て直しのためにいつまでも悲しみに浸ってはいなかった。専修主任として授業運営や後任人事などの対応を進められていかれた。そしてその後今日まで実質的な研究室のまとめ役をお引受けくださり、その運営に心をつくされてきたが、そこには何やら勅使河原先生の分までもという教え子への思いがあるように思えてならないのである。

ところで、先生は学芸大附属養護学校長の経験を交えて書かれた論文に「校長はつらいよ！」とその気持ちを代弁し、ヘッドシップとリーダーシップとの狭間で揺れる校長の気持ちを「『オーガニゼーション・マン（組織の中の人間）』の悲哀なのだろうか」と記されている（『校長の社会学』所収）。研究室の運営と校長の立場は異なるが、研究室は関係性がフラットだけに御苦勞もさぞあったことと思う。多くの薬を飲まれている姿を拝見し申し訳なく思うこともたびたびであった。

にもかかわらず、95年度には大学院生涯学習学専攻長に選出されその役割をお引受けくださった。結局最後まで「こき使って」しまったことになるが、今後も研究室の相談役として見守ってくださるよう心からお願いする次第である。